

< 講演 > 与論の言葉で話そう : バイリンガル島を目指して

著者	菊 秀史
図書名	日本の方言の多様性を守るために : 国立国語研究所第3回国際学術フォーラム
ページ	12-23
発行年	2011-03-31
シリーズ	NINJALフォーラムシリーズ ; [1]
URL	http://doi.org/10.15084/00000891

与論の言葉で話そう

——バイリンガル島を目指して——

菊 秀史 (与論民俗村経営
〔私設民俗資料館〕)

皆様、こんにちは。私は鹿児島県の最南端の島、与論島からま
いりました。どうぞ今日はよろしくお願いいたします。

与論島について

まず自己紹介と私の島の紹介をします。与論島は周囲が23kmで
す。標高が一番高いところで97mです。100mありません。ご
覧のように、たくさん砂浜が写っておりますが、浜の数が60ほど
ありそれぞれの浜に名前が付いております。小さな島です。今は
年間6万人ほど観光客が訪れております。綺麗な島ですので、ぜ
ひどうぞ一度おいでください。こういう小さい島に善良な町民が
5400人ほど住んでおります。(笑)悪い人は一人もおりません。
あと牛が5000頭ほどいますので、1万ほどの哺乳動物がいる
ということです。

これは私の家の近くの海岸ですが、ご覧のような浜が全部で60
あるということです。

これは97m地点。与論島の一番高いところから西側のほうを臨
んだ風景です。サトウキビの畑が広がっています。

私は家族で与論民俗村という民俗資料館を営んでおりますが、

与論にもこういう沖縄
風の、赤瓦の民家が昔
ありました。それから
もう一つ、茅葺の住ま
いです。台風が多いと
ころですから建物は低
く、台所と母屋、棟が
違います。分棟型です。
ご覧のように丸いとな
がり屋根が特徴です。
そして屋敷周りを防風
林で囲む。こういう二
つの伝統的なつくりが
ありました。

こちらを家族8人で
営んでおりまして、私
が村長ということだ
す。村人がたった8人
ですので、選挙もあり
ません。27年ほど私が
村長を務めておりま
す。ぜひ一度与論島に
おいでになり、我が家
にもおいでいただきた
いと思います。これ
で自己紹介は終わりま
す。



海岸の風景 与論には名前の付いた浜が約60ある



与論島の全景



きく・ひでのり

与論民俗村経営（私設民族資料館）

さて、私は今日ここに与論島のことを紹介しに来たわけでは
ありません。私の島でも方言がなくなりつつありますので、なく
したらいけないということで、今日のタイトルであります、方言
をなくさないためにはどうすればよいかということを話し合いに
来たわけです。

しかし、与論島のことばがどういうものか、皆様に聞いていた
だかないことには話は始まりませんので、少しご紹介したいと思
います。

与論島のことばを聞いてみよう

まずぜひ今日皆様に覚えておいていただきたい与論の言葉が、
「尊加那志（トートウガナシ）」です。「ありがとうございます」
という意味です。与論島では一番多く使われる言葉で、「トート
ウガナシ」が始まって「トートウガナシ」で終わるというくらい
使われる言葉です。ぜひ皆様にこれだけは覚えていただきたいと
思います。よろしく願います。

それでは1分間くらい与論島のことばで話してみますので、先
ほど狩俣先生が宮古島の地下勇さんの歌の中で「国民年金」だけ
わかりますとおっしゃいましたが、

さて私がこれから話しますことを、
皆様はどのくらいお分かりになるで
しょうか。与論島の方がこの会場に
見えていたら、手を挙げないでくだ
さい。それではよろしいでしょうか。

「トー ガシラボー ナマカラワ
ーガマドウン シマノンテイチコー

トウルフトウバシ チュフトウバサーリラバ ウレーターユッタ
ーシヤミンチッタキテイキチウワーチタバーリ。 Yunヌヌフトウ
バナシ シュンガレーチュールフトウバトウ ウットウリヤーチ
ユールフトウバナアイビュールン ワイデージナ
フトウエイ チュルフトウ イチュルバーエービュン。 シュワー
ムヌムイグトウヌイジタルバン ヘー クチカライジュールフト
ウバエービュン。 シュンガレーチュールサー ドウーナガヤーヌキ
ネーナン シュワームヌムイグトウヌイジタルバン アッセーイ
チャシユラガ チュールフトウシ チケービュールシガ ウット
ウリヤーチユールサー ピチュナガナン シュワームヌムイグトウ
ヌイジタルバン アッセーデージナフトウエイ ガシガワーガ
シチャルフター アランクトウヨー チュルフトウシ チケービ
ユン。 タンディウレーター シュウワーガナマカラウレーターカ
テイサーリユールフタ
ー ウットウリヤーヤ
アランガネー シュン
ガレー Yunヌヌフト
ウバナキーランチエイ
チチシュワーシチュル
ワーミーナテイキチ
ウワーチタバーリ」。

Do you understand?
(笑) ちんぷんかんぷ
んでしたか。では訳し
ます。

「それではこれから
私が日頃与論で使って



島の高台より西側を望む

いる言葉で一言申し上げますので、皆様よくお耳をそばだててお聞きになってください。

与論の言葉に『シユンガレー』という言葉と『ウツトゥリヤー』という言葉があります。訳しますと、どちらも『わあ、大変だ』『わあ、えらいこっちゃ』という意味です。心配事、悩み事が起きたときに思わず発する言葉です。

『シユンガレー』というのは自分や家族に心配事や悩みが出たときに『ああ、どうしよう』という意味で用います。それから『ウツトゥリヤー』というのは、他人などに心配事、悩み事が出たときに『わあ、どうしよう、大変だ、大変だけれども私には責任はない。』というニュアンスで使うのです。

今日はどうか皆様、私がこれから皆様に申し上げることは、『ウツトゥリヤー』という『方言が消えて大変だね。でも私には関係ないから』ではなくて『シユンガレー』『与論のことばが大変だ。消えそうだ。どうしよう』と心配している私の身になって、話をお聞きいただきたい。」

このように申し上げました。どうかよろしくお願いいたします。
(拍手)

私の発表タイトルは「与論の言葉で話そう―バイリンガルの島を目指して―」ということにしました。私の祖父は明治二六年生まれ、祖母が二八年ですが、その頃の人たちは与論の方言は達者だけれども、共通語はいまいちであるという世代です。私たちの世代は、幼少期に両方自然に覚えた世代です。それから昭和三〇年代末頃には与論にもテレビが入ってきますので、それ以降の世代は共通語の世代に変わります。祖父の時代、私の時代、今の時代、今現在はこちらなのです。だから私の幼少期の言語状況に戻したい。これは努力すれば、きっと二言語併用社会が与論島では

できるのではないかと
思いまして、今いろ
いろ活動をしているわけ
です。それで題を「バ
イリンガル島を目指し
て」としたわけです。

ユンヌフトゥバ を残すために

これから本題に入
うと思います。与論の
ことばを与論の方言で
は「ユンヌフトゥバ」

と言います。このユンヌフトゥバを残したい。古から受け継がれた島の宝を私たちの代で失ってはいけない。そう思いまして継承活動を始めてもう10年経ちました。未だにその衰退を止め切れません。ただこの10年の間に理解者も徐々に増えて、衰退のスピードが落ちてきているところです。ですから、このフォーラムを、一気に復興のほうへ流れを変ええる良い機会と促えてここに臨んでいるわけです。

私がここに参加した目的は二つあります。1点目は、第三者あるいは研究者の立場からではなくて、方言が衰退している現場にいる、当事者としての立場から継承活動の現状や課題を報告し、他の地域の方言継承活動の参考にしてもらうこと。そして2点目は、逆にこのフォーラムで方言復興に向けてのたくさんのご提言を賜ることです。私はそれを島に持ち帰り、今後生かして与論島



与論民俗村 赤瓦民家

で二言語併用社会が実現・復興できるように、頑張りたいと思います。そのためにぜひ皆様のお力をお借りしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど狩俣先生からお話がありましたが、本土方言と琉球方言には基本的に大きな違いがあります。本土方言の場合は、私がいろいろな県のお客さんの方言を聞きましても、だいたい意味が理解できます。これは共通語との差が近いからでしょう。しかしユンヌフトゥバを含む琉球方言の場合は古語に近いわけです。奈良・平安時代のことばが残っているということは、1000年以上も経っているわけです。私は素人ですのでよく知りませんが、1500年も経てばまったく別言語くらいにことばが変わっていくということを知りました。このあいだ奈良遷都1300年祭がありましたから、もうそのくらいの開きがあるので、外国語といってもよいくらいの違いがあるわけです。



与論民俗村 茅葺民家

つまり、ユンヌフトゥバ復興対策について考えるときに、子どもたちに教えたりするときには、私たちの場合はユンヌフトゥバは母語で、幼少のころに自然に習得したものでしたが、今の与論の子どもにとっては地元のことばでありながら外国語のようになっていま

す。ですから、そのことを頭に入れて指導をしていく必要があります。

また衰退していく形も、影山所長が関西のご出身とおっしゃいましたが、たとえば「ありがとう」は、与論は「トートウガナシ」ですが、関西だと「おおきに」というイメージがあります。しかし今は、私の民俗村に見える関西のお客様は「おおきに」を使う人はほとんどいません。「ありがとう」と言います。そういう感じで、本土方言の場合はその地域の訛りは残るのですが、会話のなかで単語自体はだんだん共通語が増えていくような変化だと思うのです。

ところが与論の方言の場合は日本語と外国語ほどの差がありますから、徐々に共通語化していくのではなくて、ユンヌフトゥバで話せるか話せないかの二者択一型だと思うのです。ですから、今四〇歳前後が、話せる一番下の世代ですから、その人たちが九〇歳くらいまでお元気だとして、50年後には完全になくなるというところが見えてくるわけです。

そういうことで、本土方言以上に、私たちの地域は危機感を持って復興に取り組まないと間に合わないと感じているところですので。

学校での方言使用禁止

さて、方言が衰退していった経過と要因を考えてみたいと思います。明治維新が起きて、徳川家から天皇中心の国家になります。天皇を中心とした中央集権国家形成の中でやはり標準語政策というのは必要になってきますから、当然、その政策が採られます。これは全国展開をされたようですが、私たちの与論島を含め

奄美とか沖縄とか、鹿児島本土でもあったのでしようけれども、奄美・沖縄の場合には「標準語励行」というよりは「方言使用禁止」を前面に打ち出した運動でした。

奄美群島はご存知のように太平洋戦争後に米国の信託統治に置かれますが、昭和28年に本土復帰をいたします。ところが復帰した後も、本州の場合は共通語推進が緩やかになっていくわけですが、奄美・与論の場合は、子どもたちが中学校・高校を卒業して、本土に出たときにことばの面で苦勞しないように、また共通語での会話能力向上が学力の向上につながるのと理由で方言使用禁止運動が継続されました。

小学校では黒板の上のほうに「今月の目標。方言を使わないようにしましょう」という努力事項が掲げられたりして、私もよく学校で方言を使ってみつかったり、友達に告げ口されたりしまして、方言札をかけさせられたり、廊下に立たされたりという思い出があります。

ところで今ユンヌフトゥバがどうして衰退したかという要因について話をするときに、方言禁止運動の負の部分だけを強調しがちです。しかし当時の先生方は自分の教え子が本土に出て行ったときに困らないように、差別されないようにという愛情を持って指導をしたと思うのです。ですから、そういう先生方のありがたさ、愛情と、また共通語推進運動があったからこそ、試験はすべて共通語で出されるわけですから、学力向上にも成果があったこともまた忘れてはならないと思います。

学校に方言禁止という校則があったことは、確かに子どもたちや親にも「方言は共通語に比べると劣ったことばである」、そしてまた「方言で話すことは恥ずかしい」という意識を抱かせました。ただそれは、親御さんが子どもたちに積極的にユンヌフトゥ

バを教えなくなった要因の一つではあっても、主たる要因ではないと思うのです。

環境の変化と方言の衰退

私は方言衰退の大きな要因は生活スタイルの変化にあると考えています。昭和三〇年代に入りますと与論島でも核家族化が進みます。それから観光客が増えてきます。沖縄の復帰が昭和四七年ですから、それまでは与論島が日本最南端の島だったのです。高度経済成長期ですから、経済的に豊かになった都会の若者たちが「日本最南端の島、与論島に行こう」ということになって一気に押し寄せました。都会の若者たちが一気に押し寄せたこと。そしてまた学校に部活動、スポーツ少年団ができたりして、子どもたちも夕方遅くまで学校にいる。帰ってきたら「宿題を早くしなさい、風呂に入りなさい」と。後はテレビを見て、寝る。

そういう暮らしの変化の中で、私が小・中学生の頃は学校内だけは共通語だけでも、一步出たら方言の世界でしたから、言語バランスが良くて、両方バランス良く覚えた感じでした。今の子どもたちは、1日のうちで8割は共通語の世界ですから、親が話していれば覚えるという時代ではありません。そういう高度経済成長期の生活環境の変化で方言が失われたのだらうと、一番大きな要因はそこにあるのだらうと思っています。

自分なりに出来ることから

私は、子どもも生まれまして、方言を伝えたいと思って、活動を始めるわけですが、平成一〇年頃のことです。与論町民、行政

の方々、議員の方々が集まって、住民と行政側とが何でも自由に討論しあう町政懇談会があつて、そこに参加したときに、「今、与論のことは危機にある。本来は家庭で教えるべきものではないが、今はそういう状況にないから、学校で取り組むべきではないか」と。「学校は昔だったらいざ知らず、読み・書き・そろばんだけを教えるところではないでしょう。今は地域の中核であり、学校自体が地域の文化も教えるべきではないか。方言の授業に取り組んでいってほしい」と訴えました。しかし当時の行政側の返事は、「方言は確かに大事であるけれども、学校は方言を教えるところではない」と、「親が家庭で責任を持って教えるべきだ」というところで打ち切られてしまいました。

私もそこでは引き下がりましたが、納得はしていませんので、では自分なりにできるところまでしようということ、たとえば観光協会、商工会など、直接関係ないようなところにも行きました。「観光とは海のレジャーだけではありません、島のいろいろな素晴らしい文化があるのだから、それ自体、方言を含めて、独特の習俗とか、いろいろとありますから、そういうものを残していくのが観光になるのではないか」と訴えました。商工会など場違いみたいなどころでも方言のことばかり言つて、本当に「この方言バカが」と言われるくらいなのですが、そのようにやってきました。

平成一三年に、私が住んでいる東区集落の子ども育成会の会長をやってくれないかという話が来ましたので、これ幸いと引き受けまして、まず集落の子どもたちを集めて、自分で資料を手書きいたしました。1時間は勉強で、あとの1時間は習ったことをカルタとか、しりとりゲームとか、伝言ゲームとかにして遊びまし

た。

これは今日持つてきました自己流で書いた参考書ですが、こういうものをその頃から書き始めて、今3冊できました。来年の春くらいには4冊目ができる予定です。このようにして作業を進めております。

まず一三年にそういうことを始めて、翌年の一四年に今度は与論小学校のPTAの副会長をやってくれないかと言われましたので、私の思いも言つて、「できれば小学校で方言の授業ができませんか。それができるのだったら副会長を引き受けます」ということで、もちろん反対は出ませんでした。そこで、PTA要覧に正式に「ユンヌフトゥバを話していこう、保存していこう」ということを載せてもらつて、それからまた始めました。

1学期は月2回図書室を借りて、子どもたちを呼んで勉強会をしました。2学期からは月1回、「総合的な学習の時間」という正式な授業という形で取り組むようになりました。私はアシスタントティーチャーとして参加しています。それが現在も続いております。平成一四年から現在まで、全校生徒対象でやっています。翌年の平成一五年、今度は中学生にも授業をするようになります。小学校の場合は私が出向くのですが、中学生の場合は、中学生が私の家に来て授業をする形を取っています。これも現在もずっと続いております。

ユンヌフトゥバの日

平成一八年。前年度の平成一七年に、私が与論町の文化協会会長を仰せつかったものですから、これはまた幸いということで、私は文化協会のメンバーに諮つて、ユンヌフトゥバの啓発活動をし

なければいけないと思ひまして、二月一八日、与論の方言で「こ
とば」を「フトゥバ」と言ひますが、それに掛けまして218（フ
トゥバ）で、二月一八日をユンヌフトゥバの日として復興運動を
やりたいと。そしてユンヌフトゥバを島民に広げていきたいとい
うことで、諮って、賛成していただいて、二月一八日はユンヌフ
トゥバの日に決定しました。

そして翌年の一九年には、他の島々でも方言熱が盛んでしたか
ら、大島地区文化協会でも、「大島地区でも保存しましょう」と
いうことになりました。そのときに、与論島では「フトゥバ」で
すが、よその奄美の島では「シマユミタ」とかの言い方が多く、
シに掛けて、四月何日かに推薦が出ました。私は1年前からそれ
を二月一八日で決定しておりましたので、「これだけは譲れない」
と我を張りました。すると反対していた人が、一人賛成し、また



与論中学校1・2年生 ユンヌフトゥバ学習の様子



与論小学校にて ユンヌフトゥバの授業



与論小学校体育館にて ユンヌフトゥバなど島の文化を伝えていくことの大切さを話しているところ

一人賛成して、だんだん「与論の菊さんに合わせてもよいのでは
ないか」となりまして、今は大島地区で二月一八日が方言の日に
なっております。

平成二〇年は与論町の中央公民館でユンヌフトゥバ講座を開講
しました。このときの受講生が19名でした。1回2時間。その半
分はカルタとか、いろいろとゲームをしながら、20回の実施です。
そして平成二〇年からは、これは全町的な取り組みですが、ユ
ンヌカルタ大会が開催されています。これは小学校での授業の様
子です。

これは与論小学校全児童とPTAの保護者の方々に体育館に集
まっていたいて、ことばの大切さとか、その他のいろいろな伝
統的な文化を継いでいきましようというこの話をさせていただ
いているところです。

これが中学生が来たときのカルタです。この写真は単語のほうですが、文章のカルタもあります。

これはユニヌカルタです。与論の方言が入っているカルタ大会ですが、砂美地来館という大きな体育館で二月頃に開催されます。毎回、盛大です。子どもたちも楽しみながら方言を覚えていきます。

今日は文化庁の鈴木様がお見えですが、文化庁関連事業で今年二月にはアニメの『ドラえもん』の声を与論の子どもたちが、方言に吹き替えしたりもしました。それも子どもたちが楽しんで参加いたしました。さらに茶花小学校も、今年から「ユニヌに学ぼう（家族でできる方言教育）」という活動を新たに始めているところでは。

そして与論小学校もPTAによる「ユニヌフトゥバ学習の成果



与論中学校 1・2年生 ユンヌフトゥバ学習の様子



ユニヌカルタの様子



ユニヌカルタ大会の様子

を上げるための取り組み」として、先ごろ、PTAが集まりまして、もっと子どもたちが多くユニヌフトゥバを覚えられられるにはどうすればよいかということで、新たな取り組みに入っているところです。

以上、活動報告をいたしました。

ユニヌフトゥバの現状は

さて現在のユニヌフトゥバの状況はどういう感じかと言いますと、四〇代以上ならほとんどの人が方言で日常会話ができます。ところが三〇代、二〇代の多くは、聞いて理解できるし少しは話せる、でも上手ではない。または聞いて理解できるが話せない世代です。一〇代以下になりますと、聞いて理解できるが話せない、

または聞いても理解できない世代になります。

日常生活においては、親同士、大人同士はユニヌフトゥバで話すものの、子どもに対して共通語で話す人が多いために、学校でユニヌフトゥバを習った子どもたちもなかなか家庭や地域で話さない状況にあります。あるいは夫婦のいずれかが島外の出身で、会話がどうしても共通語になりがちになってしまうという現実もあります。

さらに主語を表す助詞の「が」、「私が」の「が」が、ユニヌフトゥバの場合は「が」と「ぬ」と二つあり、その使い分けができないといけないのですが、若い人たちの話すユニヌフトゥバでは、その使い分けができなくなっています。それから敬語の用い方も、いわゆる共通語の敬語の用い方と違うところがありますが、これも共通語に合わせてしまっている。

先ほど狩俣先生からありましたが、第二過去、第一過去というものがありました。「ワイタン」と「ワタン」の使い分け。それも若い人たちができなくなっています。そういうこともあるので、一刻も早く復興させないといけないということを感じております。

それでも今、学校での取り組みも広がりつつあり、与論町の条例にも制定されました。この条例化の動きは他の奄美諸島にも広がっています。現在、与論では「方言は共通語より劣ったことば」、「方言で話すことは恥ずかしいこと」と考える人はほとんどいません。「方言は大切である」、「できればユニヌフトゥバを残したい」とだいたいの方は考えています。

無関心な人も、よくよく話を聞くと、「方言は要らない。方言はないほうがよい」と思っているわけではなくて、「今さら復興は無理であろう」という半分は諦めにも似た気持ちからそう思っ

ているだけで、「残ったほうがよいか、残らないほうがよいか」と聞くと、「それは残ったほうがよい」と答えてくれます。まだそういう気持ちが皆さんにあれば、島民がみな力を合わせて、本当に方言が大事だと思つて力を合わせれば復興できると私は信じています。

今後の活動について

今後の取り組みについてですが、今後はこれまでの活動を通して浮かび上がった問題を一つひとつ解きほぐしながら、活動の輪を広げていきたいと思っています。具体的には、まず最も大事なことは、島の人自ら、一人ひとりが自分の話すことば、島のことばは与論の宝である。そしてこれは自分たちの代で失ってはいけない。次の世代に伝えていくべき大切な文化である。そして自分のアイデンティティである。与論の人のアイデンティティである。と強く認識することから始まると思います。

大人自身が二言語併用生活のすごさに気付いていない。自分が二つの言語を瞬時に使い分ける能力があるのに、そのすごさに気付いていないというところがありますから、そのところを訴えていくことがまず大事であると思います。

そして継承活動はお仕着せではなく、各自が当事者意識と熱意を持たなければ成功しません。今後も根気強くユニヌフトゥバとそれを伝えていくことの大切さを訴えていこうと思っています。

また高齢者を中心に「方言を使うなと教育されたのに、今さら」とか、「集落によってことばが違うではないか」とか、「敬語の使い方が難しいから子どもたちには無理だ」とか、そういうことを理由にして継承行動に移らない傾向があります。ことばの変遷、

ことばの歴史とか、明治以降に起こった方言禁止運動の時代背景とかも説明しながら、継承活動の必要性を訴えていこうと思います。

町内には女性団体、青年団、老人クラブ、公民館連絡協議会、子ども会育成連絡協議会等、多くの団体がありますが、残念ながら現在のところ、それらの団体から自主的にことばの復興に対して取り組みが見られません。どうしても生業と言いますか、観光協会だったら観光だけ、観光とことばとか文化が結びつかない。婦人会だったら、たとえば子育てとか花壇の花植えなどが議題に上ってしまつて、子どもに方言を伝えていくということも議題にしてほしいのですが、どうもそういう団体でことばの問題が一向に上がってこないのが残念です。そういう団体さんにも今後は声掛けをしていこうと思っています。

それから現在は主に小学生、中学生を対象に継承活動が行なわれているのですが、青年層が今、空白地帯になっております。ことばの問題は空白層を作つてはいけませんので、今後青年団に働きかけをしていこうと思っています。

奄美と沖縄だけが共通語励行教育を受けたと思ひ込んで、本土の人と方言の話になるとそのことばかり言う人がいます。また同時に本土の人も自らの地域にも共通語励行教育があったことを知らない人が多いために、いろいろと誤解があります。共通語励行は全国的に推進されたことであるけれども、その取り組みに地域差があったことなども説明して、そういう誤解を取り除いていくことも大事かと思っています。

ユニヌフトゥバ復興に向けてしっかりとした仕組みと仕掛けが必要です。まず町の、あらゆる組織を網羅した一元的なユニヌフトゥバ復興委員会みたいな組織の立ち上げが必要なのと、同時に、

子どもたちのグループで核になるグループ、たとえば文化少年団みたいなものもまた必要かと、そういう組織を作る必要があると思っています。

それから教材の充実。今は私が自己流で書いた参考書がありますが、ちゃんとした参考書が必要だと思いますので、今日は専門家の先生方がたくさんおいでですので、ぜひ後でお教え願いたいです。よろしく願ひいたします。

あと、漢字の読みと書きの関係と同じで、現在の生活環境では、方言はずっと聞いて育っていれば話せるというものではなく、どうもそういうです。聞いて理解するのと話すのは別のようなので、そのこともまた理解して、子どもたちに今後教えていく必要があるかと思っています。

ほとんどの親はユニヌフトゥバが残ってほしいと思つておりますが、現実の忙しい生活の中では、子どもたちについていける共通語を使っているということなので、今後はPTAとか地域の各種団体と協議して、自分の子どもだけではなくて、地域で、道で、店で会ったときも、よその子どもさんにも気軽に方言で話しかけて、子どもたちがユニヌフトゥバを覚えて話しやすくなるような環境づくりをしていく必要があるかと思っています。

今の若者や子どもたちは方言を話すことに対してマイナスイメージはほとんど持つていません。昔の大人が持つていた、いじめられたとか、そういう経験がないわけです。ただ覚えにくいのは、現実的には覚えるのが面倒である、あるいは「方言が大切だ」と言つても、その意味がよくわからない、共通語が話せるからコミユニケーションに困らないではないか。そういう現実的な理由が大きいので、たとえば方言のなかには共通語では言い表せないようなことばがありますので、生活感情表現がより豊かにできるこ

となど、二言語併用生活の良さを教えていくことが必要だと思われるます。

内からの活動、外からの活動

それから、これが一番大事だと思うのですが、今回はこの日本の中心の都会でこういうフォーラムが開催されましたが、今度はぜひ現場で開催していただきたい。これは特に強く申し上げたいのです。ぜひ私たちの与論町に来て、こういうフォーラムを開催していただきたいと思うのです。内側からだけの運動ではなかなか殻は破れないということを常々感じております。島にいと「隣の若造が何かやっているぞ」という感じなので、島の人たちを動かすためには第三者の意見と言いますか、専門家の方々のご意見とか、内側からと外側からの意見がどうしても必要です。こういうフォーラムを開催していただいて、一気に復興に弾みをつけたい。本当に強くそのことを願っています。

最後になりますが、これまで特に明治以降、方言を少し蔑視してきたところもありまして、その地域の方言ならではの豊かな感情・感覚表現などが相当失われたと思うのです。もし共通語しかなければこの国の言語社会は「干からびた」とまでは言いませんが、どうも味気ないように思います。全国にいろいろな方言があるからこそ、ことばが生き生きとして、瑞々しくて、そして躍動感あふれるような言語社会になるのではないのでしょうか。

そこで、日本の方言の多様性を守るために私たち一人ひとりはどう行動すべきでしょうか。それに対する答えは、それぞれがそれぞれの立場でできることを行動に移すこと。それに尽きるのではないのでしょうか。もう評論しているときではないと思います。

国のほうも、豊かな言語社会のために、共通語と方言の二言語併用政策を強く推進していただきたいと思っています。

日本各地の方言、中でもユネスコで消滅の危機に瀕する言語に取り上げられた地域の継承活動の現場は次のように表現できます。

「器の中に『言葉』という宝物が入っています。その器の底に穴が開いてしまい、どんどんその宝物が漏れ落ちていく。元に戻そうと落ちた言葉を拾って器の中に入れるのだが、漏れるほうが早く、みるみる中身が少なくなっていく。手が足りません。その道行く人よ、手を貸してくれ。通り過ぎないでくれ」。こんな状況ではないでしょうか。

物事は何でも経験してみないとわからないということがありますが、ことばの消滅は経験したら取り返しがつきません。それつきりです。どうぞ皆様、各地の方言が、そして二言語併用社会が今後もずっと残っていくように、皆さんで力を合わせていきましよう。私もバイリンガルの島、与論島を取り戻すべく頑張っています。ミッシーク、トートウガナシ。ありがとうございました。

(拍手)

